
魔法先生ネギま裁判！

八カセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま裁判！

【Nコード】

N1591C

【作者名】

ハカセ

【あらすじ】

魔法先生ネギま！のキャラが裁判をする話です。ネギま好きならぜひ読んでみて下さい。

第一話【始まりの弁護】
く事件パートく

「……裁判ですか？」

「そう！もう、こうなったら裁判を開いて真犯人を見つけるのよ！」

「いや……犯人を見つけるのに裁判など必要なのでは……」

「で、弁護人はもちろん夕映ね」

「人の話を無視するんです……」

こんな会話がつい一時間前に行われました。…何故こんな話になっ
てしまったのか、場面は今朝にさかのぼります。

9月12日

午前8時25分

「ああああああああああああああああ！……！……？」

それは突然の出来事でした。

ネギ先生が教室に来るまでの朝のひと時がいきなり終わりを告げたのです。

「何なに！？いきなり大声出してどうしたの亜子！」

今叫び声をあげたのは和泉亜子さん。次いで和泉さんに駆け寄ったのが明石裕奈さんです。

おっと申し遅れました、私の名は綾瀬夕映です。私も含めて今、ク
ラスのほとんどの人が和泉さんに注目しています。

「無い……」

「え……無い、って何が？」

「…ウチの財布が無くなつとるんやあああああゝ!!!!!!」

.....

[illegible]

今度は、クラスのほとんどの人が驚きの声を挙げました。皆さん和泉さんの元へ集まります。

「ど、どうして？もしかして…盗まれたとか？」

「…分からない…」

「落としたとかはないの？」

「それはありえへん…バッグは昨日の夕方から今朝まで一回も開けてへんもん…」

「じゃあなんで…」

「もう一度良く探してみたら？」

「もう何度も探したで…でも見つからなかった…」

どうやら和泉さんの財布が紛失してしまった事件の様ですね。

「うっん…これは窃盗事件よ！スクープよ！」

「せ、窃盗事件？」

「だ、誰かがウチの財布を盗んだって事なん？」

ここで身乗り出して来たのが、スクープに命を懸ける報道部員、朝倉さんです。

「だってそれ以外には考えられないでしょ？バッグを一度も開けてないのなら、落とした可能性はゼロって事だから、盗難事件になり…スクープになる！」

いちいちセリフの最後にスクープを入れないで欲しいです。

「でも、いつウチの財布が盗まれたん？バッグはずっと閉まってた

のに……」

「うーんと……バッグを最後に閉めたのはいつ？」

「え？……えっと、昨日の放課後、部活に行く前の教室で閉めたのが最後やね」

「その時、教室には他に誰がいた？」

「ええと………あ」

「え？」

「考えて見ると……他には誰もおらへんかった……！」

「………えええ……！？じゃ、じゃあ盗んだ人はいなかったって事？」

……教室には和泉さん一人で、他には誰もいなかった……？………いえ、あの時は確か……

「ああああああ！！思い出したわ！！」

「おおっ！何なに？」

「確か、ちよつと教室を出た時間があつたんやけど、その時廊下で誰かと擦れ違った様な気がする」

「それよっ！教室を開けている時に盗んだんだ！で、それは誰だった？」

室に向かつてたから…」

忘れ物をした事は私も聞いたから知っていますが…どうやらまずい時間帯に教室へ行ってしまったみたいですね…。

「て事は……本屋が犯人…？」

「ちょ…ちょっと朝倉、無責任な事言わないでよ！廊下で擦れ違った位で犯人だって言うの？」

反論したのはハルナ。ぐいと身を乗り出してきました。

「で、でもさ、誰もいない教室に本屋は行った訳じゃない？」

「しかし、だからと言ってのどかが犯人だとは言えません」

私も身を乗り出します。

「確かにそうだけど、状況的に盗めたのは本屋だけで…」

「それは状況証拠です。決定的ではありません」

「う……………」

「待った！」

「「！？」」

と、いきなり会話を止めたのはハルナでした。

「こんな事しててもラチがあかないから、ここは一つの確に犯人を見つけ出す方法を使おう！」

「犯人を…？どんな方法ですか？」

「裁判よ！」

………

「裁判んんんんんんん！？」

「………さ、裁判ですか？」

「そう！もう、こうなったら裁判を開いて真犯人を見つけるのよ！」

「いや……犯人を見つけるのに裁判など必要ないのでは………」

「で、弁護人はもちろん夕映ね」

「…人の話を無視するなです…」

「良いんじゃない？ここまで来たらとことん追及するよ！」

「ここまで来たら…って…そこまで話し合いましたっけ？」

「あ、朝倉さんまで…。」

「でも、このままだとのどかが犯人になっちゃっうよ？」

「う………」

「ゆ、夕映え…」

のどかがすぎる様な目で見て来ます。…しょうがないですね。

「…分かりました。…でも、裁判と言うのはどの様にすれば良いのですか？」

「おっけー！裁判は放課後行っから、その時準備しよう。亜子、放課後まで大丈夫？」

「う、うん。大丈夫やけど…。」

「じゃあ、私が検事役をするわね」

「分かった、頼むわよ朝倉！」

…つまり、私が弁護人と言う訳ですか。随分大掛かりにする気ですね…。

第一話【始まりの弁護】～事件パート～（後書き）

次回から裁判パートに入ります。

第一話【始まりの弁護】〈裁判パート〉

〈9月12日

午後4時

女子中等部3 - A教室〉

夕映

「（しかし準備が良いですね…。放課後になつてすぐにクラス内に
弁護人席・検事席・裁判長席が作られましたし…）」

ざわざわざわざわざわ……

夕映

「（…よく見たら他のクラスの人も見に来てますね…。…盗難事件
なのに何だか楽しんでいる様な…）」

カンッ！

夕映

「（…木槌なんて何処から持って来たのですか…。）」

あやか

「皆さん静かにして下さい。

えゝコホン。クラスの皆様の要望により、私、雪広あやかが裁判長
をやらせて頂く事となりました。

今回、和泉さんのお財布が盗まれたと言う事で、その真偽、事実関
係、そして犯人を見つける為にこの様な裁判を開きました。

それではこれより、被告人・宮崎のどかさんの法廷を開廷致します。

弁護人の綾瀬夕映さん、検察官の朝倉和美さん、共に準備は宜しいでしょうか？」

和美

「検察側、準備完了よ。」

夕映

「弁護側、準備完了です。」

あやか

「では朝倉検事、さっそく事件についての詳しい説明をお願い致します。」

和美

「了解よ。」

…事件を詳しく調べたところ、財布が盗まれたとされる正確な時間帯は被害者である亜子が教室から出ていた四時十五分から三十分の間だったみたい。

そして、その間犯人が教室に入って財布を盗った訳だけど、その犯人が容疑者ののどかね。

理由は、亜子の話より、教室から出た時にのどかと廊下で擦れ違っている。つまり教室にのどかは入っていたと言う事になる訳。

そして、そうなると必然的に財布を盗めた人物は宮崎のどかのみになる。

以上の事より、宮崎のどかが財布を盗んだ犯人だと断定したわ」

あやか

「な、なるほど…。そこまで調べていたのですね」

和美

「当然よ。さあ、どうする弁護士？」

夕映

「（…私はのどかの潔白を当然信じています。だとすると、のどかは財布など盗んでいない…それを証明できれば…）」

あやか

「どうしました弁護士？」

夕映

「いえ。…ところで検事さん、和泉さんが教室から出ていた時間が随分と正確ですが、どうやって調べたのですか？」

和美

「ああ、これはね、教室の施錠時間が関係あるのよ」

夕映

「施錠時間？」

和美

「弁護士は昨日の放課後に図書館島に行っていたから知らないだろうけど、部活やら何やらで教室の施錠時間が非常に早まったのよ」

夕映

「えっ…それが“四時三十分”と言う事なのですか？」

和美

「そうよ。亜子が教室に帰って来た時、施錠する直前だったからね」

〈施錠記録〉

教室の鍵は、四時三十分には完全に閉められていた。

夕映

「……………！（証拠品…。）」

和美

「他に聞きたい事はある？」

夕映

「…あの、先程言ったのどかを犯人とした根拠というのは、状況証拠ですよ？」

和美

「…！」

夕映

「決定的な証拠は無いじゃないですか！」

和美

「…やっぱりそう来たか」

夕映

「えっ…？」

和美

「実は、宮崎のどかを犯人とした根拠はまだあるのよ！」

夕映

「ええっ!？」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ!

あやか

「静粛にお願い致します!」

夕映

「な…何なのですか、その根拠とは!？」

和美

「まず一つ目…実はね、亜子が教室に帰って来た時、財布の入ったカバンが開けられていた事が既に確認済みなのよ!」

夕映

「え……ええええええ!!？」

和美

「そう…被告人がカバンに手を出せる状況が出来ていて、尚且つカバンが開けられていた……。つまり!犯人は宮崎のどか以外に有り得ないのよ!!」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ!

あやか

「静粛に!静粛にお願い致します!」

和美

「亜子はバッグをきちんと閉めていたけど、全開になっていたんだって。」

夕映

「し、しかし！その位で証拠とは……」

和美

「亜子は、教室から出てから、今日の朝まで一度もカバンを開けていないわ！だから、開けたのは被告人だけと言う事になる！」

夕映

「第一、カバンを一度も開けていないなんて、不自然です！カバンから何も取り出したりはしなかったのですか？」

和美

「その日、部活動がとても忙しかったからカバンを開ける暇など無かった！……そう考えれば何の不自然さも無いわ！」

夕映

「うつつうつ……！」

あやか

「これは……朝倉検事の言い分の方が妥当でしょう。確かに、昨日は集まりなどでとても慌ただしかったですから」

く 和泉亜子のカバンく

事件当時、何者かに開けられていた。

和美

「ふふふふふ……どう、弁護士？」

夕映

「（……………朝倉さんの言った事が正しいとするならば、当然バッグを開けたのはのどかと言う事に……………」

和美

「…さて、根拠はもう一つあるわよ」

夕映

「えっ！（まだあるのですか…？）」

和美

「裁判長、検察側は“証人”を召喚したいと思うわ」

あやか

「しよ、証人ですか？それは一体何に対しての…？」

和美

「もちろん…現場の目撃者よ！」

夕映

「も…目撃者ですって！？」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に！静粛に！分かりました、証人を呼んで下さい」

夕映

「（事件の目撃者…つまりのどかが財布を取った所を見た訳なのでしょうか…？）」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

和美

「では証人、名前と職業を」

千雨

「長谷川千雨。職業は…麻帆良学園女子中等部3 - A に在籍、で良いか？」

夕映

「（長谷川さんですか…）」

あやか

「それで…長谷川さんは何を目撃したのですか？」

和美

「それは…証言によって明らかになるわ。千雨、事件の時に
証言をお願い」

千雨

「ああ、分かった」

夕映

「（さて…ここからが本番、ですね…）」

↓証言開始

目撃したこと

千雨

「私は昨日の放課後、忘れ物をして教室に一度行ったんだ。
そしてその教室に入る直前、実は宮崎と擦れ違っていたんだよ。多
分その時に財布を盗っていたんじゃないか？
確か時間は四時半過ぎ位だったかな。教室の中で確認したから間違
い無い。」

夕映

「な…何ですって！？のどかと擦れ違っていた…！？」

和美

「そう！千雨…証人は被告人の姿を目撃していた！これが決定的な根拠よ！」

ざわざわざわざわざわ……

あやか

「それでは綾瀬弁護士、“尋問”をお願い致します」

夕映

「じ、尋問…ですか…（とにかく…私はのどかの無罪を立証する事を考えるのです。それならば今の証言には誤りが…）」

和美

「なにぶつぶつと呟いてるのよ。さっさと尋問しなさい」

千雨

「手短に頼むぞ。早く寮に帰りたいからな」

夕映

「（…証拠品は“二つ”…ここから道を開くしかありませんね…）」

〈尋問開始〉

『私は昨日の放課後、忘れ物をして教室に一度行ったんだ。』

夕映

「“忘れ物”とは何ですか？」

千雨

「メモリーカードだよ、パソコンの。机の中に置き忘れたんだ」

夕映

「はあ…。（メモリーカードを机に入れておくのもどうかと思いますか…）」

『そしてその教室に入る直前、実は宮崎と擦れ違っていたんだよ。』

夕映

「それは本当なのですか!」

千雨

「そ、そんなに声を張り上げなくてもいいだろう…。本当だよ、宮崎が教室から出て来たのもハッキリ見た」

夕映

「うつん…」

『多分その時に財布を盗っていたんじゃないか?』

夕映

「そんな憶測で物を言わないで下さい!」

和美

「弁護人、実際に財布は無くなっているんだし、憶測は勝手でしょう?」

千雨

「そつだよ、別に良いだろうが」

夕映

「（良い訳がないでしょう…）」

『確か時間は四時半過ぎ位だったかな。教室の中で確認したから間違いない。』

夕映

「異議あり！」

千雨

「!？」

和美

「!？」

あやか

「!？」

夕映

「証人…千雨さん！今の証言には、決定的な矛盾があります！！」

千雨

「な、なんだと！？」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に！…どう言う事ですか弁護士？」

千雨

「そ、そうだ！どう言う事だよ！」

夕映

「どうもこうも言った通りの事です！今の証言によると、証人の千雨さんが教室に入っただのが四時半過ぎですよね？」

千雨

「あ、ああ」

夕映

「しかし！この証拠品…“施錠記録”によると、教室の施錠時間は四時三十分です！」

和美

「あ…ああああああっ！！？」

夕映

「そう！四時半にはすでに鍵が閉まっていて、教室に入る事など出来ない筈なのです！！」

千雨

「な……………何iiiiiiiiiiiiっ!？」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に！静粛にお願い致します！」

和美

「異議あり！」

ち、ちよつと待った！確かにそうなるけど、多少の誤差はあるですよ！」

夕映

「誤差？」

和美

「そう、誤差よ！千雨が言った時間は“四時半過ぎ”と言う曖昧な時間。だから教室に行って出て来たのが施錠時間前…もしくはギリギリ同時でもおかしくはない！」

千雨

「そ、そうだよ！どこに矛盾が……」

夕映

「異議あり！」

残念ながらそれでは全くツジツマが合わないのです！」

和美

「つ…ツジツマだって？」

夕映

「よく考えて下さい。被告人、宮崎のどかは教室に入る時に和泉さんと擦れ違っています。そして、すぐに本を取って教室から出る時に長谷川さんと擦れ違いました。

しかし！もしここで、長谷川さんが教室から出るのと施錠が同時であつたならば、その後教室に来た和泉さんはバッグを取る事が出来ないではないですか！！」

千雨

「ああああっ！」

あやか

「た、確かに！施錠されたのが長谷川さんが教室を出る時だったならば、和泉さんは教室に入る事が出来ません！」

夕映

「つまり！“四時半過ぎ”と言つのは矛盾しているのです！」

千雨

「う…うあああああああ！！！！」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に！静粛にお願い致します！」

検

「異議あり！」

そ、そうだ！あれよ！時計の見間違いつて事もあるじゃない！」

弁

「異議あり！」

そんな筈はありません！証人は、四時半“過ぎ”と証言しています。これは、確実に“四時半”と言う時間を確認したから言った物です！」

和美

「なああああッ！！」

夕映

「……千雨さん」

千雨

「な、なんだよ……？」

夕映

「“四時半に教室に入った”と言うのは嘘ですね？」

千雨

「……わ、私は……う……嘘なんかついてないぞ……！」

夕映

「…えっ？」

千雨

「そ、そくだよ！私はちゃんと腕時計を見たんだ！ハッキリ見た！時間は四時半を過ぎていた！」

夕映

「ええええっ！？」

ざわざわざわざわざわ…

カンッ！

あやか

「静粛に！静粛にお願い致します！！」

夕映

「い、いやいやいやいや！ですから、それはあり得ないんですよ！施錠時間との矛盾が……」

千雨

「んな事関係無い！！私は見たんだよ！この目で！間違い無い！」

夕映

「間違いなのですってば！！！」

和美

「こらこらこら！！私を差し置いて口論しない！」

千雨

「おい朝倉！お前は一応私の味方だろう！もっと反論しろ！」

和美

「えー！…じゃ、じゃあ…むしろ時計の方に着目したらどう？」

夕映

「と、時計…？」

検

「そう！例えばその時計が“十分進んでいた”とか！」

夕映

「うー！そ、それは……」

千雨

「いや…それは無い…。」

和美

「…えっ？」

千雨

「私の時計は、電波式なんだよ。…一秒の狂いも無い…」

夕映

「！…！」

和美

「えええっ！？」

夕映

「（これは一体……。千雨さんが嘘をついている様には見えなくなってきました…）」

あやか

「長谷川さん…いえ、証人。本当に四時半と言つ時間を見たのですか？」

千雨

「見た、間違い無い！」

和美

「で、でも千雨！それじゃあ……どうやってシジシマを合わせる気？」

千雨

「どうって……それはお前らの役目だろう？」

和美

「そ、そりゃあそうだけど………」

夕映

「……………なるほど」

和美

「…え？」

夕映

「千雨さん……証人。あなたはあくまでも、“四時半過ぎに教室に入った”と主張するつもりですね？」

千雨

「あ、ああ。そうだよ」

あやか

「弁護士……やはり矛盾ですか？」

夕映

「……しかし、証人がここまで言う以上、嘘だとは考えにくくなってきました」

和美

「え、で、でもそれじゃあ矛盾が生じるんでしょう？」

夕映

「ええそうです。……ですから、これから“新しい証言”をして頂こうと思います」

千雨

「あ、新しい証言だと？」

あやか

「一体何を証言させるのですか？」

夕映

「“教室に入ってから出るまでの行動”です。」

あやか

「……それで矛盾を無くす事が出来るのですか？」

夕映

「分かりませんが……可能性はあります。とにかく、証言をして頂きます。宜しいですね、証人？」

千雨

「わ、分かったよ……」

夕映

「（“四時半”の矛盾が何を指しているのか今は分かりませんが、とにかく新しい情報を知れば何か見えて来るかも知れません）」

和美

「……………」

↓ 証言開始

教室に入ってから↓

千雨

「鍵は当然開いていたから、急いで入って自分の席に行っただ。けど、教室の中はかなり暗かったから走っては行けなかったな。で、ここで時間を確認してすぐに教室を出た。」

あやか

「なるほど……別段変な点はありませんわね。では、尋問をお願い致します」

夕映

「…分かりました。（変な点が無い訳がありません…それを見つけ出します）」

く尋問開始く

『鍵は当然開いていたから、急いで入って自分の席に行つたんだ。』

夕映

「“鍵が開いていた”と言う事は、まだ施錠はされていなかったと言う事ですね？」

千雨

「そりゃあそうだろ、閉まったら入れないし」

夕映

「（まあそうですね…）」

『けど、教室の中はかなり暗かったから走っては行けなかったな。』

夕映

「く、暗かったのですか…？」

千雨

「うん。まあ、正確に言えば、薄暗くて足下が見にくかったって感じだな」

和美

「あれ…電気は点けなかったの？」

千雨

「電気……は気が留まらなかったな。施錠時間の事ばかり考えてたから」

夕映

「足下が見にくかったと言う事ですが…“机”は見えましたか？」

千雨

「机…と言うよりも、ハッキリ言って真っ暗に近い薄暗さだったからな」

夕映

「（いくらなんでも電気点けるでしょう！）」

あやか

「ふむ…それで、証人はその後…？」

『で、ここで時間を確認してすぐに教室を出た。』

夕映

「異議あり！」

千雨

「…えっ!？」

夕映

「残念ながら、証人の証言には致命的な矛盾があります!!」

千雨

「え……ええええええええええ！？」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に！静粛！！」

千雨

「な、な、な、何だよ矛盾って！！」

夕映

「証人……教室の中で腕時計を見た”のですよね？」

千雨

「そ、そうだよ！それが何か悪いか？」

夕映

「悪いも何も、真っ暗に近い薄暗さの教室でどうやって時間を確認したのですか！！」

千雨

「あ……！！……あああああああ！！！！」

和美

「異議あり！」

残念だけど、その主張は通用しないよ！」

夕映

「……？」

和美

「弁護士は、教室の中が真っ暗だったから腕時計は中では確認出来ない、と言う考えだけど、もし腕時計にバックライト機能があったら！」

夕映

「ば、バックライト？」

和美

「そ、それだ！！私の時計は暗い所で操作すると、光って文字盤が見える様になるんだよ！」

和美

「どう？これなら矛盾は……」

弁

「異議あり！」

“時計を操作した”……そんな筈はありません！」

和美

「え、ええっ！？」

夕映

「証人は教室に入った後、電気も付けずに手探りで自分の机に行くと証言しています」

千雨

「だ、だから何だよ……！」

夕映

「つまり！電気すら付ける暇が無かった筈なのに、時計を見る暇などあった訳が無いのです……！」

証

「あ……あああああ……！！！！！」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

あやか

「静粛に……！」

検

「異議あり！」

し、しかし！証人は、“四時半過ぎ”と言つ時間をきちんと覚えて
いる！時計を見ていない筈が無いわ……！」

夕映

「その通りです」

和美

「な……！」

夕映

「証人は、確実に四時半と言う時間を確認しているのです。……でも、それは教室に“入る前”でも“中にいる時”でもありません」

あやか

「つ、つまり“教室から出た時”と言いたいのですか？」

夕映

「そうです！」

和美

「異議あり！」

証人がいつ時間を見ようが別に関係無いでしょ！」

夕映

「異議あり！」

いいえ、非常に重要な事なのです！」

和美

「じゃあ！どこが重要なのか言ってみなさい！」

夕映

「朝倉検事……財布が盗まれたと思われる時間帯はいつでしたっけ？」

和美

「え…そ、それはもちろん四時十五分から三十分の間よ。最初に言っただでしょ！」

夕映

「ではつまり、“和泉さんが教室を出た時間が四時十五分”と言う事になる訳ですね？」

和美

「そ、そうなる…わね」

夕映

「では、今までの審理を整理してみましょう。
まず、四時十五分から和泉さんが教室を出ます。
そしてのどかが和泉さんと擦れ違い、教室に入ります。
のどかはすぐに本を取って教室を出て、そしてまたその際に長谷川さんと擦れ違います」

あやか

「確かに…そうまとめるのが自然のようですね」

夕映

「ここからが重要です。この一連の流れは、どう長く考えてもせいぜい五分弱しかかかっていないでしょう」

夕映

「そりゃあ、二人の出入りは同時に行われているからね」

夕映

「そう考えると、長谷川さんが教室に入ったのは“四時二十分頃”と言う事になります！」

和美

「二十分……………あ…あああああっ！！？」

千雨

「え、え！何だよ朝倉！！」

夕映

「先程言いましたね？証人が教室を出た時の時間は“四時半”だと。」

千雨

「だからなに……………あ……………」

夕映

「教室に入った時間が四時二十分！
教室から出た時間が四時半だとすると！

証人はこの“十分間”一体何をしていたのですか！！！！？」

証

「う……うわああああああああああああ！！！！」

ざわざわざわざわざわ……

カンッ！

和美

「こ、これはその……い、異議を……」

夕映

「証人……答えて下さい」

千雨

「……………ああ。犯人は……私だよ」

あやか

「……!!」

和美

「……!!」

夕映

「……!!」

ざわざわざわざわざわ……

あやか

「せ、静粛に……!!」

夕映

「（よし…やりました！！）」

………

千雨

「だって、しょうがねえじゃねえか！！昨日は変な偶然が沢山重なったんだから！」

夕映

「変な偶然？」

和美

「ふむ…どうやら千雨は“動機”を説明したいみたいね。」

夕映

「動機……“財布を盗んでしまった理由”ですか。（て言うかそれは普通検察側が証明するべきなのでは…？）」

千雨

「そうそう！言い訳みたいになるが…説明して良いだろ？」

和美

「仕方ないね」

〔証言開始〕

動機と真相〕

千雨

「実は昨日、財布をたまたま忘れちまって昼も何も買えなくてピンチだった訳よ。

だから、さつさと寮に帰ろうと思ってただけど、その途中で大事なメモリーカードを忘れた事に気が付いて、急いで取りに戻ったんだ。教室の前で宮崎と擦れ違ったが、別に気にせず教室に入った。

急いでたから電気も何も付けずに自分の席に行こうとしたんだけど、足踏み外して和泉の机を蹴っ飛ばしてしまっ………そしたら机の上のカバンがドサリと。

慌ててカバンの中の物が無事か開けて確認したんだけど、その時に財布らしき物がポロリ。そんな事をしている内に十分も経っていたんだな。

本当は寮で返すつもりだったんだけど、部活動やら何やらで忙しかつたらしく会えなかったんだ。

そんなこんなで朝の騒動とこの裁判。言い出せる訳が無いだろう？」

夕映

「これが事の真相でしたか…」

あやか

「綾瀬さん、一応細かい所まで聞きたいので尋問宜しいですか？」

夕映

「…しょうがないですね。」

〈尋問開始〉

『実は昨日、財布をたまたま忘れちまって、昼も何も買えなくてピ
ンチだった訳よ。』

夕映

「じゃあ、お昼食べていなかったのですか？」

千雨

「そう。隣の席で私の腹の虫聞こえなかったか？」

「 弁
.....」

『だから、さつさと寮に帰ろうと思ってただけど、その途中で大事なメモリーカードを忘れた事に気が付いて、急いで取りに行ったんだ。教室の前で宮崎と擦れ違ったが、別に気にせずに教室に入った。』

夕映

「では、のどかの証言は間違っていなかった訳ですね」

千雨

「そう言う事だな。朝倉はかなり疑ってたみたいだけど」

和美

「.....え！いやいやいや！私は一応検事って立場だから.....」

夕映

「はい、次行きましょう。」

『急いでたから電気も何も付けずに自分の席に行こうとしたんだけど、足踏み外して和泉の机を蹴っ飛ばしてしまっ………そしたら机の上のカバンがドサリと。』

夕映

「もしかして、それで初めてカバンの存在を知ったのですか？」

千雨

「そうそう、真っ暗だったからな。かなりびっくりしたよ」

夕映

「（真っ暗の中で机なんか蹴って痛くなかったのですかね……）」

千雨

「そりゃ痛かったよ！」

『慌ててカバンの中の物が無事か開けて確認したんだけど、その時に財布らしき物がポロリ。そんな事をしている内に十分も経っていったんだな。』

夕映

「開けちゃったんですか？勝手に？」

千雨

「いやいや！理由無しに開けたんじゃないよ。カバンを落とした時に、“バキッ”って音がしたから心配になったんだよ」

夕映

「“バキッ”…ですか？」

千雨

「うん、何かが割れる音だった」

夕映

「（そりゃそうでしょう。）」

和美

「…その事なんだけどさ」

夕映

「え？」

和美

「亜子の話によると、カバンの一番外側のポケットに入れてたみたいなのよね」

千雨

「な、何を？」

和美

「むちゃくちゃ堅い、おせんべい」

夕映

「……………」

千雨

「……………」

夕映

「…………で、その時に財布が出て来た訳ですか」

千雨

「そうそう。で、つい魔が差して……な」

あやか

「“つい”じゃありませんわ！窃盗は立派な犯罪です！」

千雨

「い、いや……でもよ……」

『本当は寮で返すつもりだったんだけど、部活動やら何やらで忙しかったらしく会えなかったんだ。』

夕映

「あ、じゃあ、“盗んだ”のではなく“借りた”だけなのですか？」

千雨

「そうそう！ただ、返すタイミングが掴めなかっただけなんだ」

和美

「まあ確かに、亜子の話によると、昨日の帰宅時間は午後十一時だったらしいよ」

夕映

「（遅！）」

千雨

「午後十一時には私は寝てたぞ」

夕映

「（早！）」

『そんなこんなで朝の騒動とこの裁判。言い出せる訳が無いだろう？』

和美

「そりゃあそうだよね…」

夕映

「…だからのどかに罪をなすり付けよう？」

千雨

「う…いや…本当に済まなかった。」

あやか

「大体の事は分かりました。長谷川さんは、和泉さんにきちんと財布を返して、謝って下さいね」

千雨

「……もちろんそうするよ」

夕映

「それから、のどかにも謝って下さいね」

千雨

「分かった」

和美

「やれやれ……検事って一度やってみたかったんだけど、負けちゃったよ」

夕映

「いやいや！朝倉さんが勝っちゃったらのどかが犯人になっちゃうじゃないですか！」

千雨

「（……なんか、ものすごい罪悪感を感じるな……。てか、大掛かり過ぎるだろ…他学年の人までこの裁判を見に来てるぞ…。もう絶対こんな事しねえ…）」

あやか

「それでは！裁判長である私、雪広あやかが被告人・宮崎のどかさんに判決を言い渡します。」

《無罪》

あやか

「それではこれにて閉廷致します！！」

カンッ！

第一話【始まりの弁護】〜裁判パート〜（後書き）

いかがでしたでしょうか。いろいろ矛盾点もあるかも知れませんが、それは大目に見て下さい…。

とりあえずエピソードもあるのでもう少し続きます。

第一話【始まりの弁護】～エピソード～

〽9月12日

午後5時〽

千雨

「本当にごめんな、黙って財布なんか盗っちまって…。」

亜子

「ええって、ええって。別に悪意があつた訳やないんやし、ウチは財布が帰ってくれば良かったんやから。」

夕映

「しかし、確かにかなりの偶然が重なっていましたね。」

長谷川さんが財布を忘れ、さらにメモリーカードを忘れて、和泉さんがちょうどその時バッグを教室に置きっ放し。さらに、机から落ちたバッグからは何かが割れる音…開けて見ると財布がポロリ。」

和美

「なんだか、盗んでくれて言ってるみたいだね。」

夕映

「まあ…一番大変だったのはのどかなんですけどね。」

和美

「まあね。犯人見つかって良かったよ。」

千雨

「……一応放課後言うつもりだった…とか言っても説得力無いだろうな……。」

亜子

「もうええって。でも、お詫びに何か奢ってな。」

千雨

「……まあ全面的に私が悪いしな。分かったよ。」

ハルナ

「夕映ええええええ!!」

夕映

「あ、ハルナ。(出ました、勝手に裁判を始めようと提案した首謀者。)」

ハルナ

「いやあ！見事な弁護っぷりだったじゃない！嫌がってた割にはなかなかサマになってたよ？」

夕映

「…ま、もう二度とやる気はありませんけど。」

和美

「ええええええ？結構楽しいのに。裁判。」

夕映

「いやいや、やりたいならあなた方で勝手にやって下さいよ。」

亜子

「だからってまた事件起こしちゃ駄目やで。」

和美

「ちえ〜。」

夕映

「やれやれですね…。」

そんなこんなでようやくこの面倒臭かった裁判が終わりました。もうこんな事は、出来ればしたくないです。正直言ってかなり疲れるです…。

和美

「ところで千雨？」

千雨

「ん？」

和美

「亜子の財布を盗んだ後、いくら使ったのさ？」

千雨

「……………」

ハルナ

「ん？どうしたの？」

千雨

「いや……これと言って良いのかどうか……………」

和美

「？別に良いでしょ、ちゃんと返したんだし。」

千雨

「いや……だって、財布の中、二百円しか入って無かったから……結局使ってないんだよね……。」

和美

「……………に……………」

ハルナ

「……………に」

夕映

「にひやくえん……………。」

亜子

「あれ、みんなどうしたん？もうクラスにいる人はほとんど帰った……………え、ちょ！？」

和美

「たつたにひやくえんの財布で……………」

ハルナ

「これだけの大騒動……………」

あやか

「……………私など六法全書を読んで来たと言うのに……………」

のどか

「私は犯人と疑われて……………」

千雨

「……………よく考えたら無性に腹が立ってきた……………」

夕映

「（のどかやいいんちゃんまで！？）」

亜子

「え？あの…ちょ……………」

亜子

「ひゃいあいああああああアアアアア！！！！」

よく考えたらこれだけの大騒動にしたのは、ハルナと朝倉さんではないですか…。…まあもう良いでしょう。

そんな訳でこの事件は完全解決しました。
ハッキリ言ってもう弁護士役はイヤです。

それでは。

第一話【始まりの弁護】～エピソード～（後書き）

宜しければ、評価・感想など書いて頂ければとても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591c/>

魔法先生ネギま裁判！

2010年10月28日01時03分発行